



光が…

塩田平民話研究所 所長 稲垣 勇一

この五月初旬、自分なりの衣替えに合わせて、書斎の配置換えを本棚中心にした。

以前の書斎は家の北西の隅で、暗い上に六畳は狭く、たちまち本に押し潰された。それに戌亥の方角は、古来日本では死霊の出入り口である。鬼門からの漠然とした不安よりも、死霊の方が暮らしの現実近く、私にはむしろリアルな異界との境界に思えた。家の図面は自分が引いた。文句は天に唾するようなもの。すべては自分に返ってきた。

五十代半ば、連れ合いの画室の上に、書斎を新しく設けた。十畳の床面とは別に東西南北は本棚。ただし、西は本棚の上に広々と二つの窓。一・二階の廊下片

面は天井まで本棚。旧書斎は書庫。新書斎にもまあまあレベルの本棚。これで当分本に攻められることはあるまいと思っただが、甘かった。彼らは情容赦なくあらゆる場所に侵食して、新書斎が清々したのは東の間。空いているのは西窓の前だけ。『えい、ままよ』と二つの窓の前を埋めた。光は南の比較的小さな窓から入るだけ。かくて書斎はまた穴倉になった。それから三十五年。齢九十。残りの人生、屋内の主たる居場所に光が欲しい。昼間から電燈は御免だ。西窓を生かすしかない。そこにある棚を床に降ろそう。それが今度の書斎配置替えの主な理由だった。居場所はずいぶん狭くなった

第 26 便
2023.8.1

塩田平民話研究所
〔事務局〕
長野県小県郡
青木村大字当郷
2072 番地 2
☎0268-49-1231
✉shiodadaira.minwaken@outlook.jp
http://www.shiodadaira.minwaken.net



が、「起きて半畳、寝て一畳」だ。楽々と横になれる空間があればそれで十分。それは確保した。結果、昼間がともかく明るい。電燈のいらぬ昼間がこんなに部屋の間々まで鮮明に小さなものまで見えるのだということ。大袈裟でなく何十年ぶりに発見。西側の二つの窓を開けて網戸にすれば、すっかり忘れていた西風が、澱んだ部屋の空気を静かに攪拌して、幽かに西の匂いを運ぶ。

模様替え後の書斎は、全く新しい私の居場所になった。寝転べば目の前に疎遠だった本たちの背表紙が並ぶ。自然に手が出て夜更かしが時に朝まで延びる。かくて十二時就寝の決意が、また猿の反省で終わる。

本からはもう言葉に尽せない大きな恩をもらった。それは人からもらった恩の大きさに等しい。やはり私の宝物である。



木霊

ご縁があつて、この春から「里山料理講座」に通っている。「四季を通じて、地域風土に根ざした素材で料理とくらしの知恵を学ぶ」とい

う。民話に登場する料理といえば、囲炉裏で鍋が定番だが、鍋以外のメニューにも惹かれた▼また、民話研の学習で、里山の位置づけを詳しく学んだこともある。そんなこんなで、料理を通して一歩でも民話の世界に近づきたかったのかもしれない▼かつて里山は、暮らしと農業と森が不可分に結びつき、まさに民話の舞台として、日々の暮らし、文化の伝承には欠かせない場所であった▼ちなみに5月の講座は「朴葉のむしご飯・せり・山みつば・わらび・山ぶき」などが並んだ。かつての自給自足、冷蔵庫なしの時代に美味しくかつ安全に保存する知恵や技術が生まれてきた▼意外だったのは、参加者が皆若いこと。赤ちゃんをオンブのお母さんをはじめ、おそらく20〜30代の女性を中心。ファッションも今風だ。「命と環境を守り育てる営み」に最も敏感な人たちが集まった気がする。これから調理の合間を見て、彼女たちとボチボチ話するのが楽しみだ。(きなこ)



民話と山岳信仰 白山伝説に迫る

論考

前号「ふるさと
の民話探訪21『白山
信仰』に、上田市に
伝わる白山信仰・白
山民話について記
した。

白山信仰の原点
は、言わずと知れた
白山。石川・福井・
岐阜の3県に跨る。
御前峰・剣ヶ峰・大
汝峰の白山三山を
形成し、最高峰の御
前峰には白山比咩
神社奥宮が祀られ
る。

白山信仰の祖は
泰澄。717(養老元)
年に、夢想の中に現
れた白山妙理大菩
薩に招かれ、弟子二
人(臥行者・浄定行
者)を伴って登拝し
たとされるが、伝説
上の人物とみる見
方もある。

平安時代に入り、
加賀・越前・美濃に
それぞれ禅定道(修
行登山路)と馬場
(登拝拠点)が設け
られる。神仏習合に
より820年に各馬場
に神宮寺となる白

山寺・平泉寺・長滝寺が建立され
るが、明治の神仏分離・廃仏毀
釈によって強制改組され、白山比咩
神社(加賀)・平泉寺白山神社(越
前)・長滝白山神社(美濃)とな
る。



白山の禅定道と三馬場

廃仏毀釈により山頂や登山道
に置かれていた仏像は引き下ろ
され廃棄されることとなったが、
うち8体が林西寺(白峰村・現白
山市)住職の手によって収集され
白山本地堂に安置されている。
加賀白山比咩神社を総本宮と
する白山神社は、各地に2700社余
り鎮座し、その多くは菊理媛神
(白山比咩神)・伊弉諾尊・伊弉冉
尊の三柱を祭神とする。

上田市真田町の山家神社、同山
口の白山比咩神社も、この流れを
汲む。ただし、山家神社の祭神は
大国主神・伊邪那美神・菊理媛神で
あり、産土神としての大国主神が
主神となっている。社伝によれば、
別当浄定が718(養老2)年に白山
比咩神社を勧請したとされる。神
仏習合の時代には白山大権現と

称し仏像も多くあったが、廃仏毀
釈により近隣の寺に移された。山
口の白山比咩神社は、733(天平
5)年の勧請とされる。

白山信仰や白山比咩神社の勧
請に伴い、関連する民話も伝播・
創造された。真田・山口の社に関
わる民話は、本紙前号を参照され
たい。総本宮白山比咩神社周辺に
は、開祖泰澄を登場させる民話
が多い。開山の
謂れを伝える
「舟岡妙法の
窟」、大蛇退治
「千蛇ヶ池」ほ
か、「菊仙女」「
一蔵」など。



加賀 白山比咩神社総本宮

日本の山岳信
仰は、自然崇拜のアニミズム的信
仰、山に対する畏怖・畏敬の念か
ら発した古神道や、伝来した仏教
(特に密教)への信仰と結びつい
て、「修験道」と呼ばれる独自の
宗教を生み出した。白山信仰のほ
か、立山・富士・出羽三山・恐山・
熊野など多くの山岳信仰を数え
る。白山信仰は、周辺地域を潤す
水源となる山への信仰であり、古
代より水神・農業神として手取
川・九頭竜川・長良川流域を中心
に崇められてきた。禅定道は、そ
の流域に開設されている。そうし
た原始的信仰は、泰澄以前から存
在していた。
(弘)

「民話 語りっこ 学びっこ」 11月5日(日)開催 川西公民館

昨年引き続き、「民
話 語りっこ 学び
っこ」を開催します。今
年は、会場を川西公民
館に変更しました。
昨年同様、所長の講
演、民話語り発表会、
交流会の予定です。今
年の民話研究所の年間
テーマは「白山信仰」。
所長の講演も、テーマ
に沿った内容になる予
定です。
皆様のお出かけを心
からお待ち申し上げます。

川西有線放送で 「昔ばなし」を放送

川西有線放送からお声がけい
ただき、有線放送を通しての語り
を今年4月から始めました。
月1話、2回放送していただい
ています。放送時間は夜7時、食
卓を囲む一家団欒の時間帯です。
これまでに、「でいらぼっちとか
みさん」「背振山に石楠花がない
わけ」「つつじの娘」「冠者さまと
ごまのサヤ」などが放送されまし
た。

第六感劇場 「つづじの娘」で語り

5月13日、「犀の角」で上田の民話「つづじの娘」を題材に新しい演劇体験を模索しようという試みに参加した。

娘に扮した俳優は深夜の太郎山へと向かい、恋しい男に「ただ、会いたい」と夜の山道を駆け抜ける。観客は酒を飲み歓談しつつ舞台にいない俳優を「想像すること劇場体験」しようという企画だ

ふるさとの民話探訪22 つづじの娘



上田を代表する民話「つづじの娘」。秋祭りの宵に出会った山向こうの松代の若者に逢いたくて、夜な夜な手にモチ米を握りしめて太郎山を越える山口の娘。恋しい若者に刀の刃の岩棚へ突き落とされてしまう。岩棚には、娘の血のように赤いツツジの花が咲く。

った。会場には真っ赤なつづじが美しく活けられ、昔話の語り、音楽、朗読などの作品が上演され、観客の感覚を刺激していた。

その夜の坂井弘子さん(塩田平民話研究所)の語りは、娘の心情



5月、刀の刃のつづじの花を見たくて、太郎山に登った。裏参道を登ると、「泣き坂」「金明水」など地名の由来や伝説が書かれた「太郎山民俗遊歩」の看板。昔話の世界へ入っていくような不思議な感覚に包まれる。あとわずかで山頂というところに「刀の刃」の案内板。尾根伝いに大峰山へ行く細い道に入る。右は黄金沢、左は地獄谷。山道脇の所々につづじの花が咲く。オレンジ色の大きな花はレンゲツツジ。小さくて赤みの強いのがヤマツツジだ。登り下った鞍部に、ひととき道幅の狭い瓦礫の道が現れた。両側が切り立っていて足が

に寄り添った「女語り」。愛する男に殺された娘の哀れさに共感した甲いの語りである。村社会に生きる男女の心のすれちがいがあった。一方、男の視点の「男語り」もあるのではないかとこの感想もあり、民話のメッセージについて話は尽きなかった。ふと気が付くと時間は過ぎていた。娘は太郎山のどのあたりだろうか。主役のいない舞台を前に思いを馳せる。「場」を超えて「時間」を共有する新たな演劇体験となった。

(寛恵)

すくむ。ここだ、ここに違いない。木に掴まって恐る恐る覗き込んでみる。木々の間から見える地獄谷は底が見えないほど深い。ここで突き落とされたら生きてはいられない。谷の木々の合間にも、赤いつづじの花が点々と見える。真っ暗なこの道を若者に向かっていた。ただひたすらに走る娘の強い思い、その想いを受けとめきれず突き落としてしまった若者の想い。山を渡る風に吹かれて、想いに浸った。

(弘子)



産川

探し物をしていない時に思いがけない物を見つけてしまう、という事はよくある事で…。先日懐かしい本を見つけた▼「きりのカーニバル」(たむらしげる作)だ。私が育児をしていた30年近く前、先輩のお母さんが読み聞かせしてくれた本で、私はその本がとても好きになった。水彩で描かれたその絵は美しく、少年が友だちのロボットと一緒に夜、うちを出て朝日を見に行くという、小さな冒険のお話。私はその本を手元に置きたくて、ママ友さんのツテで譲っていたのだ。この本を読み返すうちに思いは自身の幼い頃に及んだ。私が好きだった本は何だったのか。「だるまちゃん」とてんぐちゃん」が最初に頭に浮かんだ。自分が幼かった頃、そして子育ての時と、二度巡り合った絵本の世界。私の大切な一冊一冊を読み、子どもたちと一緒に冒険のトンネルをくぐってみたいと思った。

(道子)



民話とわたし Ⅲ — 子どもの心によせて —

泉田保育園長 小林 朋子

泉田保育園の周辺にはあやめ街道があり、春には見事な花を咲かせ、子どもたちの散歩コースになっています。マスクを外しての久しぶりの語り。表情から喜怒哀楽を知る機会が劇的に減った子どもたちに、今日の民話はどう映るんだろう。半信半疑で、稲垣先生に「手強いですよ。覚悟してお話ししてくださいね。」とお願いをしました。

作務衣を着た一人のおじいさんが小さな椅子に座り、懐から毛糸の帽子を出してひよいかぶって語りが始まると、保育室の雰囲気ガラッと変わりました。民話の中には方言や昔の言葉、意味が分からない事がいっぱいかもしれません。でも、私の心配をよそに、おじいさんをじーっと見て話を聞いている。ゆったりとした時間が何とも言えず心地よい不思議なひとときでした。受け取る子どもたちは理屈抜きでからだで楽しんでるんだなと感じました。全く覚悟なんていらぬ素敵な時間が流れていきました。

昨年の春は語りの会の後、先生方とあやめ街道を散歩したなあ…。あの時の他愛もないおしゃべりが一瞬頭をよぎったのも、民話の不思議な力のおかげだったのかもしれない。民話の不思議な力のおかげだったのかもしれない。民話の不思議な力のおかげだったのかもしれない。毎回、語りの会を楽しみにしている子ども達と私です。

美術館でお茶と民話

青木村郷土美術館

まだあちこちに雪が残る2月半ばの日曜日。青木村郷土美術館で語りの会が行われた。ここ三年のコロナ禍により、郷土美術館はじめ関係者の方々が何度も企画をしてくださったにも拘わらず、状況によって中止せざるを得な

かった。今回無事開催することができ、代表して郷土美術館との連絡に当たってくれた民話研究所の仲間も安堵したと思う。久しぶりに訪れた郷土美術館の喫茶室。私も語りをして参加できたことが嬉しかった。何よりも

事務局だより

◆総会を4月26日(水)に行いました。

◆本年度の「昔ばなし語りの会」の開催日は、左記のとおりです。

上田創造館 6月25日(日)

2024年 8月20日(日)

2024年 1月28日(日)

とつこ館 3月24日(日)

よかったのは、お茶をいただきながら参加してくださった方々と民話や伝説に関するいろいろな話でできたことだ。できれば一日中でも話を聞いていたいところだった。時間が都合でそうもいかず、まだまだ話し足りないと思われ、残惜しそうな様子で帰っていった男性の姿が印象に残っている。今回、企画と準備をしてくださった関係者の方々、連絡役や語り手、会の進行、お手伝いと参加した民話研究所の仲間、そして、貴重な時間を割いて参加して下さった方々。改めて語りの場は人々の力あって成り立つと感じる。(和枝)



編集後記

ようやくコロナ禍が明けたかに見える。だが、完全収束ではない。油断は禁物だ。次の波が来ないよう、予防策を怠らないようにしたい。▼マイナンバーカードの伸びが次から次と発覚している。信用は地に落ちた。カードの返納希望者が後を絶たない。2万円のマイナンバーの返還は必要ないという。政府が躍起になって進めた普及策、1兆8千億円は水の泡だ。アベノマスク以上の愚策というほかない。そもそも、国民一人ひとりの個人情報政府が掌握することが、カード普及の本質的狙いだ。便利さと引き換えに魂を売ることがないようにしたい。保険証を取り上げるなど、もつてのほかだ。▼6月の昔ばなし語りの会のテーマは、「今、語りたいたい・伝えたい民話」だった。表に出ない真実、本物の思慮を問う民話が多かった。国民の目に映らないようにして、闇の中で歴史は動く。こんな時代だからこそ、真実は何かを見極める必要がある。▼本紙「民話とわたし」シリーズを「Ⅲ」にバージョンアップした。塩田平民話研究所の所員・友の会員だけでなく、民話に関心をもつ方々に広く登場してもらおうことにした。本号は、その第1弾。(弘)